

## 建築家河内義就の建築活動について

### ARCHITECT YOSHINARI KOUCHI'S HISTORY AND HIS WORKS

李 明\*, 石丸 紀興\*\*  
*Ming Li and Norioki ISHIMARU*

Yoshinari KOUCHI, who was born in Hiroshima on June 13 in 1913, graduated from Yokohama engineering college in 1935. He studied under Junpei NAKAMURA, who was the famous architect and educator. After his graduation, he worked under Mumoru YAMADA, who was one of the most famous rationalistic architects in Modern Japan, and he went to Manchuria for working as an architect at architecture section in Ministry of Communications Financial Bureau. Since July in 1939, he had designed buildings as an engineer at architecture section in General Bureau of Post Affairs, Manchoukuo. After the Second World War, he returned to Japan and made a great contribution to reconstruction of Hiroshima City by designing many buildings at AKATUKI architecture design institute. In 1951, he established KOUCHI YOSHINARI architecture design institute. He was not only an energetic architect based in Hiroshima but also the person who was active in various fields of the academic studies and the building administration.

**Keywords:** *Architect, Yoshinari KOUCHI, Modern Architecture, His Works, Expression of tradition*

建築家、河内義就、近代建築、作品傾向、伝統表現

#### はじめに

日本の近代建築の発展において、中央における建築家もしくは建築組織の活動が大きな役割を果たしたことは衆知のことであり、近大建築史の研究においても特筆されている。しかし、地方における建築家の活動は、これまでの近代建築史研究の中であまり重視されてこなかった。実際には地方にも多くの建築家の活動があり、そのような活動を含めた研究を進めることにより日本の近代建築史をより総体として把握することが可能になるだろう。

このような前提を踏まえ、今回地方における建築家の活動に関する研究を進めていく過程で、戦後の広島を拠点として活躍した建築家河内義就（以下河内と略す場合がある）に関するいくつかの情報が明らかになった。河内義就<sup>1</sup>は大正2年6月13日広島市国泰寺町で生まれ、昭和7年に横浜高等工業学校建築科に入学し、中村順平の弟子となる。昭和10年卒業後通信省経理局営繕課に就職し、山田守の元で仕事をする。昭和14年7月から終戦までは満州国郵政総局経理科営繕股技手仕官、技佐仕官として建築活動を行う。戦後は被爆都市広島の初の設計事務所であった暁設計事務所に所属し、広島の復興において旺盛な建築活動を行う。昭和26年には独立して河内義就設計事務所を設立し、広島を中心に設計活動を行うほか、日本建築学会や日本建築家協会など社会団体でも幅広くその才能を発揮した人物である。そこで、本稿は、中村順平の弟子として出発し、戦前戦後を通じて活躍した建築家の一人である河内義就の建築活動について考察することにより、地方における建築家の活動の一つの実像を解明しようとするものである。第1章では河内の経歴については拙稿<sup>2</sup>において触れているが、その後の調査により新たな知見を得た点があるので、改めてその人物像について若干の確認と補足を

行う。第2章では河内義就の建築活動について、①通信省営繕課・満州国郵政総局経理科営繕股時期、②暁設計事務所時期、③河内義就設計事務所時期の三つに分けて若干の確認や考察を試みる。第3章では第2章で得た知見を河内の一連の発言などに関連させながら彼の作品傾向や位置付けについて論じる。

研究の方法として、遺族から提供された河内の生前に残した記録などを中心に、暁設計事務所時代の同僚であった大旗正二<sup>3</sup>の証言や当時の関連記事などの文献と調査を通じて補充した<sup>4</sup>。なお、地方における建築家の活動に関する既往の研究としては、角幸博博士、上田恭嗣博士、石田潤一郎博士らの研究<sup>5</sup>や拙稿<sup>6</sup>があり、本稿ではこれらにも多くを負った。

#### 1. 河内義就の人物像

拙稿<sup>7</sup>において明らかにしたように、河内は大正2年6月13日広島市の国泰寺町で生まれ<sup>8</sup>、高田義就と命名されたが、昭和16年広島県山形郡筒賀村河内家<sup>9</sup>の長女に入婿として入り、河内と改姓する。河内が残した「自伝」<sup>10</sup>によれば、大正15年3月広島県立広島第一中学校に入学し、昭和5年3月から2年続けて東京美術学校を受験したが落ちる。河内は「当時広島の建築のうち、何と云っても浅野図書館の設計が、秀逸なもので、小さいながら端麗で、気品にあふれ、私の好きな建築でした。これは、美校の岡田信一郎教授の設計で、その美しさにひかれ、美校進学を決意し、2年続けて受験したわけです。」<sup>11</sup>と後になって述べているように、岡田信一郎の設計による図書館建築を見て感銘を受け、建築家を志したのである。その後、昭和7年4月に横浜高等工業学校建築科に入学し、中村順平の弟子になる。当時デザイン分野、特に審美眼、比例の美の追究を極

\* 広島国際大学工学部建築学科 専任講師・博士(工学)

Lecturer, Department of Architecture, Faculty of Eng., Hiroshima International Univ., Dr. Eng.

\*\* 広島国際大学工学部建築学科 教授・工博

Prof., Department of Architecture, Faculty of Eng., Hiroshima International Univ., Dr. Eng.

めて重視するなど芸術としての建築を教育することがその大前提となった横浜高工では、デッサンの実技試験を加えた入学試験を通過した学生に対して英才教育が行われたという<sup>12</sup>。河内の残した資料<sup>13</sup>には「1年生の時はギリシャ、ローマの建築の模写と、日本人なるが故に日本の古典建築の模写を課せられ、2年生の製図は、アナリチックという古典の部分、自分なりに組立て直して一つのファサードを制作する勉強と、24時間エスキスといったアイデア画面を提出する徹夜勉強もさせられ、3年生になって初めて、設計の段階に入った」と横浜高工時代に受けた建築教育について述べている。河内も「今思い出しても、18、19歳であれだけの建築図面を描き上げたものだと、自ら感心しています」<sup>14</sup>と回顧しているように、当時の製図教育の厳しさが伺える<sup>15</sup>。河内は「50年を回顧すれば我が師中村順平教授を語らねばならない。エコー・ボザールの教育手法を導入し古典の習熟を課された。洋画で石膏デッサンが必須であるように設計デザインにおいても美しい建築に接し、体得することにあるとの意である。」と述べ、「古典の基礎の上に日本人による日本の現代建築を創造すべきであるとの理想を力説された。そしてそれ以上に近世ヨーロッパにおいて確立された建築家の職能とその倫理を叩きこまれた。」と後になって述べている<sup>16</sup>ように、恩師中村順平の古典に根ざす建築の根元的な美的把握を目指した建築教育は、後の河内の建築活動に大きな影響を及ぼしたと考えられる。河内の学校時代の習作として「飛雲閣正面図」があり、『建という芸術』（中村順平著、昭和37年）上頁179に掲載されている。なお、河内が「広島市旭町に建てた両親の自宅は、昭和10年に学生であった私が基本設計をし、父が村田正君に製図と管理を頼んで、新築した住居です。」と述べている<sup>17</sup>ように、3年生の時父の委託により高田邸の基本設計をするが、その詳細は不明である。

昭和10年3月河内は横浜高工を卒業し、逓信省の経理局官籍課に就職し、昭和13年4月1日には逓信省経理局官籍課技手になる。山田守の下で4年間の仕事をし、昭和14年7月1日満洲国郵政総局経理科官籍課に転勤する。昭和18年4月技佐仕官に昇任し、昭和19年9月満洲国大同学院17期後期修了。

昭和20年8月19日免官帰国した河内は、郵政省への帰属を捨てて<sup>18</sup>焼け野原だった広島での新しい街づくりに参加することを選択し、昭和21年10月暁設計事務所<sup>19</sup>に入所する。河内は「逓信省に帰れ、その伝言もありましたが、東京への転入は住宅、食糧事情が困難であり、焼け野原となった郷里広島を建設する最大のチャンスであると、また理想の街造りの一助にもなればと、事務所を探しました。父の縁で、村田正氏が暁設計を開設していることを知り、そこを訪ねて、昭和21年10月から働く事となったわけです。」<sup>20</sup>と広島を活動の拠点と選んだ理由を述べている。後の昭和26年2月独立して河内義就設計事務所を設立する。こうして河内は、焼け野原になった広島を背景に旺盛な建築活動を行なった。昭和23年には広島県建築家クラブ（現在の広島県建築事務所協会）が設立する<sup>21</sup>が、河内はその創始者の一人でもある。建築家クラブの設立時期などに関する座談会記録<sup>22</sup>によると「戦後間もなく進駐軍の駐留施設の発注が始まり、設計事務所経営が広島でも成り立つ見通しがついたことから、事務所の開設が目立つようになって、設計料について協調する必要が生じ、建築家クラブとして昭和23年8月1日の旗揚げた」と記している。なお座談会により設計料の協調を主張したのは河内

義就であったことが明らかになった。

表1 河内義就の略歴

年号	出来事
大正2年	6月13日広島市国泰寺町生まれ、高田義就と命名される。
昭和7年	3月横浜高等工業学校建築科入学、中村順平のボザール式教育を受ける。
昭和10年	3月横浜高等工業学校建築科卒業。習作として「飛雲閣正面図」がある。
昭和10年	4月1日逓信省経理局官籍課に入社。
昭和13年	逓信省経理局官籍課任技手。
昭和14年	7月1日、任満洲国郵政局経理科官籍課(係)転職。
昭和16年	広島県山県郡河内家の長女と入婿として結婚、河内義就と名付ける。
昭和18年	任満洲国郵政局経理科官籍課技佐仕官に昇任。
昭和19年	満洲大同学院17期後期修了。
昭和20年	8月19日満洲国勅諭し事実上免官帰国。
昭和21年	10月1日暁設計事務所に入所。
昭和23年	6月30日広島平和記念カトリック聖堂設計コンペにおいて準佳作入賞。10月広島県建築家クラブ設立し、創始者の一人になる。
昭和24年	3月10日広島平和公園コンペに入賞。広島県建築設計事務所協会理事。
昭和26年	2月20日河内義就設計事務所を設立。
昭和29年	9月「グロピウス博士を囲む座談会」に参加(11名参加丹下健三含)。
昭和31年	広島県建築士会理事。
昭和32年	広島県建築士会常務理事(昭和32～昭和38まで)。
昭和33年	欧州を視察。平和記念館で「欧州視察旅行帰朝報告」講演会昭和33年1月18日。
昭和34年	広島労働金庫設計が広島県建築士会建築作品コンクールに入選。
昭和35年	「建築設計監理業務規定」(改正版昭和35年3月1日)委員会委員長。
昭和36年	5月15日から日本建築協会常議員。5月21日農林大臣より、備後地方総合開発推進の功により表彰される。
昭和37年	広島市建築行政協会副会長。11月14日日本建築士連合会長から日本建築士会創立10周年を記念し「建築士会発展に寄与された」功績により表彰せられた。
昭和38年	広島建築家協会三代目会長(昭和38～昭和41)。5月12日農林大臣より備後地方総合開発推進の功により表彰。
昭和39年	広島県建築士会理事(昭和51年まで)。8月8日住宅設計懸賞募集審査会審査員。12月13日座談会、「建築士会は如何にあるべきか」に出席。広島建築士協会『建築士会誌』昭和39年12月号に「拡大する郊外団地からの通勤輸送(合併後の大量輸送はモノレールで)を発表する。
昭和40年	2月日本建築士連合会主催の懸賞競技建築設計応募作品の審査員。
昭和42年	10月25日日本建築士連合会長から日本建築士連合会創立15周年を記念「建築士会発展に寄与された」功績により表彰される。
昭和45年	(協)広島県設計技術センター理事。
昭和46年	5月29日広島県建築士会から建築士会発展に寄与賞。
昭和47年	4月広島工業大学特任教授。11月20日日本建築士連合会長から日本建築士連合会創立20周年記念並びに第15回建築士会全国大会を記念し「建築士会発展に寄与された」功績により表彰せられた。
昭和51年	広島県建築士会専門委員会委員(設計管理委員会委員)。
昭和53年	5月19日広島県建築事務所協会七代目会長昭和56年まで。
昭和56年	昭和58年まで日本建築家協会理事。「都心国有地活用への提言(高齢者福祉対策と民生活推進方策)」を題に広島市長へ提言する。
昭和58年	日本建築学会中国支部支部長。21世紀ひろしまビジョン会議委員。
昭和59年	日本積算協会理事。日本建築学会『建築雑誌』1984年3月号に「師、中村順平」を発表。
昭和60年	勲五等瑞寶章受章。河内義就設計事務所相談役、息子河内國利が社長に就任。
昭和62年	10月5日広島で死亡。

表1は、河内義就が生前残した資料を中心に、広島市建築行政協会創立30周年記念誌『よせむけ』(昭和58年1月28日)、社団法人広島県建築士会『広島県建築士会25年史』(昭和53年3月10日)、中国新聞等を参照し、また大旗正二氏の証言などに基づいて筆者が作成した。

昭和29年9月パウハウス創設者で、近代建築設計界の世界リーダーであったワルター・グロピウスが来広し、宮島、平和記念公園などを視察する。グロピウスは「建築家と我々の環境」を題として講演会を行い、広島建築事務所協会から「グロピウス博士を囲む座談会」が宮島で行われた。東京からは丹下健三、野生司義章が同行し、その他中国、四国地域の設計事務所と大学機関から河内義就ら9人が参加した。この座談会の記録<sup>23</sup>によると、河内は積極的に日本の伝統と近代建築のあり方について質問するなど日本的な近代建築に深い関心を表したのである。その他、河内は昭和32年末欧州の視察を行い、翌年1月18日平和記念館で「欧州視察旅行帰朝報告」講演会を行うなど、欧州における近代建築の動向を広島の建築業界に紹介する役割を果たす。昭和39年12月13日広島県建築士会主催「建築士会は如何にあるべきか」の座談会に出席し、「建築設計監理料率について」(広島建築士会報昭和39年12月)を発表する。昭和48年には、「拡大する郊外団地からの通勤輸送(合併後の大量輸送はモノレールで)」(広島地方交通会議所『交通と運輸』第3巻第1号昭和48年1月15日所収)を発表し、また「ひろしまの建築今昔」を題として日刊中国建設新聞(現在は中建日報)昭和59年4月13日～

昭和59年5月14日版に渡って連載し、広島の前戦戦後の建築を語っている。昭和56年には広島県建築設計協会会長、日本建築家協会理事の身分で、「日本人の心のふるさと」を題としてその1〜9に渡って、西欧と日本の建築文化の比較、民族と建築、風土と建築、とりわけその民族の心と建築について伊勢神宮などを例として上げながら論じている。なお河内は「師、中村順平」（『建築雑誌』1984年3月号）において、「桂離宮の美は万人が認めるところであり、日本の誇り否世界の美の一つであろう。桂の伝統を現代建築に創造し得る人は誰であろうか。国籍不明の建築の続出する中で真の現代日本を生み出す日はいつになるのであろうか。」と日本の伝統を賛美し、日本的な現代建築に深い関心を示した。なお、晩年では「都心国有地活用への提言（高齢者福祉対策と民活推進方策）」を題として、高齢化社会対策の一助として福祉施設の建設に目を向けてほしいと広島市に要請するなど、時代を読み取る鋭い感性を表わしたのである。

河内は、昭和24年1月14日広島県建築設計事務所協会理事、昭和36年5月15日日本建築協会常議員、昭和38年広島設計監理協会会長、昭和41年広島県建築審査会委員、昭和45年6月広島県設計技術センター理事、昭和47年広島工業大学特任教授、昭和53年広島県建築事務所協会7代目会長、昭和56年日本建築家協会理事、昭和59年日本積算協会理事等、役職を務めるなど、設計活動以外にも幅広く活躍した<sup>24</sup>。

昭和60年河内義就設計事務所相談役になり、息子河内國利が社長に就任する。昭和62年10月5日広島で死亡。以上により、河内の経歴をまとめると表1になり、河内義就が地元の新聞及び雑誌に発表した著述リストをまとめると表2のようになる。

表2 河内義就が地元の新聞及び雑誌に発表した著述リスト

題名	掲載誌
ヨーロッパより帰りで	広島県建築士協会『建築士会誌』昭和33年1月号
建築設計監理料率について	広島県建築士協会『建築士会誌』昭和39年12月号
拡大する郊外団地からの通勤輸送（合併後の大量輸送はモノレールで）	広島地方交通会議所『交通と運輸』第3巻第1号昭和48年1月15日
日本人の心ふるさと その1〜その9	不詳 昭和56年頃？
都心国有地活用への提言（高齢者福祉対策と民活推進方策）	広島市長への提言 昭和56年頃？
師、中村順平	日本建築学会『建築雑誌』1984年3月号
ひろしまの建築今昔その1/職制は東洋のハニス	『中国建設新聞』昭和59年4月13日号
同上その2/都市の非近代性を痛感	『中国建設新聞』昭和59年4月14日号
同上その3/町屋は木造の規格平面	『中国建設新聞』昭和59年4月17日号
同上その4/広島物産陳列館が完成	『中国建設新聞』昭和59年4月18日号
同上その5/秀逸だった浅野図書館	『中国建設新聞』昭和59年4月19日号
同上その6/建築も機能・合理主義に	『中国建設新聞』昭和59年4月20日号
同上その7/スタートは古典の習熟	『中国建設新聞』昭和59年4月23日号
同上その8/念願だった事務所設立	『中国建設新聞』昭和59年4月25日号
同上その9/広島復興を願って帰郷	『中国建設新聞』昭和59年4月27日号
同上その10/平和公園は丹下氏の案	『中国建設新聞』昭和59年4月28日号
同上その11/公会堂にホテルを併設	『中国建設新聞』昭和59年5月1日号
同上その12/平和大橋はノグチ氏	『中国建設新聞』昭和59年5月2日号
同上その13/大型コンベの機巧聖堂	『中国建設新聞』昭和59年5月4日号
同上その14/世界的に大反響の児童文化館	『中国建設新聞』昭和59年5月8日号
同上その15/斬新な設計の「ガスパル」	『中国建設新聞』昭和59年5月9日号
同上その16/民間のRCは農協ビル	『中国建設新聞』昭和59年5月10日号
同上その17/独立、初仕事は毎日会館	『中国建設新聞』昭和59年5月11日号
同上その18/バスセンターに携わる	『中国建設新聞』昭和59年5月12日号
同上その19/訴え続けたい職能の原理	『中国建設新聞』昭和59年5月14日号

注：『中国建設新聞』は、現在『中建日報』として刊行されている。

## 2. 河内義就の建築活動

本章では、河内義就の建築活動について、その所属によって①通信省営繕課・満州国郵政総局経理科営繕股時期、②暁設計事務所時期、③河内義就設計事務所時期の三つに分けて考察する。

### 2-1. 通信省営繕課・満州国郵政総局経理科営繕股時期

昭和10年3月横浜工高を卒業後、河内は通信省経理局営繕課に就職し、昭和13年4月1日通信省経理局営繕課技手になる。そこで彼

は、日本最初の近代建築運動とされる分離派建築会の闘将であり、合理主義建築を推進した通信省営繕課の旗頭である山田守に出会う。通信省時代を回顧して河内は、「通信省にいた私の上司、山田守氏は、日本セセッションの代表者の一人で、東京中央電信局のような名作を残した人ですが、一転して、東京通信病院のごとき超近代的合理主義派設計に転換します。私の最初の仕事は、この病院の原寸であるタイル割でした。」<sup>25</sup>と山田守との関わりを述べている。資料によれば昭和12年竣工した東京通信病院は昭和9年に建設計画が始まり、昭和10年3月に敷地が決定。その後短期間で山田守を中心に設計が行われ、12月には設計が終了したとされている。ここで、河内が入省したのは昭和10年3月であり、その設計に参加したという河内の発言もその可能性が高いと考えられる。また河内によると通信省に勤め、最初に責任を持って設計したのは通信省電気試験所広島出張所（昭和12年竣工）であるというが、この建築は山田守の作品集<sup>26</sup>に山田守設計として掲載されている。電気試験所広島出張所（RC造、2階建）はプレーンなファサードにやや縦長な窓、隅角部が丸められているなどのモダンなデザインになっている。なお、山田守の下で広島貯金支局（昭和12年竣工）の設計製図に関わる<sup>27</sup>。広島貯金支局は地下1階地上4階の鉄筋コンクリート建築であり、機能によって窓の大きさが異なるデザインになっている。これらの建築の設計に河内がどのような役割を分担したのか不明であるが、何れも山田守の合理主義建築の特徴をよく表わしており、これらの近代合理主義建築の設計に触れたことは間違いなさだろう。この時期の河内が製図等に関係した作品をまとめると表3のようになる。

昭和14年7月満州国郵政総局経理科営繕股に転勤し、昭和18年4月技佐仕官に昇任するなど、昭和20年8月19日免官帰国するまで6年間の満州国での建築活動が推測されるが、河内も資料を残していないため、いまのところ満州国での活動は不明である。

表3 戦前河内義就が製図等に関係した作品

作品名称/構造/竣工年/所在地
●高田邸（基本設計河内義就、施工管理村田正）/木造/昭和10年/広島市旭町
●東京通信病院（設計山田守、タイル割設計分担）/RC造/昭和12年/東京
●広島貯金支局（設計は山田守、河内は製図分担）/RC造/昭和12年/広島市
●通信省電気試験所広島出張所（山田守との共同作品）/RC造/昭和12年/広島市
●その他、満州での作品が推測されるが、不明である。

表3は、河内義就が生前残した私的資料により作成した。

### 2-2. 暁設計事務所時期

昭和20年8月終戦で帰国した河内は、昭和21年10月戦後広島初の設計事務所であった暁設計事務所に入社する。当時事務所代表であった村田正と昭和22年に入社した大旗正二と共に、広島の復興において精力的に建築活動を行った。拙稿<sup>28</sup>で明らかにしたように、昭和22年に入って暁設計事務所の設計は主に河内が担当する。この時期の河内の作品をまとめると表4になる。

広島女学院中、同高校校舎及び講堂（昭和22年）、山陽中学校（昭和22年）、広陵高校（昭和22年）はいずれも木造であったが早期撤去され、それらに関する資料も残っていないため、その詳細については不明である。また河内が設計した木造建築として広島児童文化会館<sup>29</sup>（昭和21年竣工、写真1）と広島瓦斯本社（昭和24年竣工、写真3、4）がある。昭和25年5月24日建築基準法が公布され、11月23日施行された。建築士法<sup>30</sup>も同年5月24日公布され、7月1日からの施行となった。それに伴って、広島でも資材が自由販売になり、民間建築家という職業が社会的に認められ始めたのである。その頃、暁設計の3人の建築家は協同に大正海上火災保険KK広島支店

(昭和 25 年)、社会保険広島市民病院 (昭和 26 年、写真 2)、農協ビル (昭和 25 年)、等の本格的な鉄筋コンクリート造建築の設計を手掛ける。なお、河内は、昭和 23 年行われた平和記念聖堂コンペや翌年の平和記念公園コンペに積極的に参加し、それぞれ準佳作、佳作を受賞する。このように晩設計事務所時期、河内は広島の復興においてかなり重要な建物を設計する役割を担う一方、各種コンペにも積極的に参加するなど旺盛な建築活動を行ったのである。河内の晩設計事務所時期の作品については拙稿<sup>31)</sup>において既に多く論じているので、ここでは、広島瓦斯本社と平和記念聖堂のコンペ準佳作入賞案について若干の考察を試みる。

1) 広島瓦斯本社ビル: この建物の当初設計は鉄筋コンクリート造の地上 6 階、地下 1 階の規模であったが、終戦直後の鋼材やセメントが極度に不足していた時期でもあって、建築資材の統制によって認可を得ることができず、やむなく計画を変更して、木造 2 階建て (一部鉄筋) となった<sup>32)</sup>。昭和 23 年 12 月 25 日に着工、翌年 9 月に完成 (延べ 593 坪、工事費は約 2,100 万) し、同年 11 月 1 日広島瓦斯創立 40 周年の記念式典をかねて落成式が行われた。施工は株式会社大林組が担当した。建物の 1 階には主として広島支店の営業部門ならびにガス器具のショールームとグリルを配置し、2 階には事務空間や講堂が設けられている。木造ながらタイル張りの外観は、車寄せの庇が大きくせり出し、大きな窓が連続するなど当時の広島では斬新なデザインであった。電車道にそってバラックが一面に建ち並んでいたそのころの紙屋町かいわいに、被爆後最初の本格的な建物として姿をあらわした広島瓦斯本社は“ガスビル”と呼ばれて市民の関心を集めたという。藤野綿業株式会社社長・広島瓦斯モニター藤野孝子も「…24 年にはすばらしいガスビルができた。延べ坪 600 坪ばかりの 2 階建てであった。西側の一角はグリルになっていて、2 階の講堂が今のグランドホテルの役をしていた。…その頃のある本に、ここに広島市に誇るべき瀟洒な近代建築物が完成したのである。毅然として将来の広島市を象徴するかのごとく新装もはなやかに出現した“ガスビル”はなお虚脱感から抜け切れないで放心したような一般の空気をぐっとひきしめ、希望の女神の如く朝な夕なにその前を通る市民の復興意欲をいやが上にもそそった、と書かれたのを思い出す。その当時のガスビルは、広島市に希望と光を与えた本当に美しい姿であった。」と述べている<sup>33)</sup>ように、この建物は、復興当時においては斬新なデザインであり、人々に大きな関心と復興の意欲を湧き上がらせた建物であったことが伺える<sup>34)</sup>。

2) コンペ入賞案: 衆知のように、昭和 23 年の平和記念聖堂コンペ、翌年の平和記念公園コンペ、この二つのコンペは、日本全国、さらには世界的にも注目され、多くの建築家達が参加した。河内の記念聖堂コンペ案は『平和記念広島カトリック聖堂建築競技設計図集』(東京新宿洪洋社、昭和 24 年 6 月 15 日)に所収されているが、平和記念公園コンペ案は資料が残っておらずどのような計画案だったのか不明である。ここで平和記念聖堂案について若干の考察を試みる。記念聖堂のコンペは戦後日本の建築設計競技において大きな話題を残しており<sup>35)</sup>、2 等入賞の丹下健三案については議論されているものの、そのコンペの全般を視野に入れた言及はほとんどない<sup>36)</sup>。河内案 (図 1) は、広場に塔を設け、その広場を中心に周辺に聖堂と講堂を配置する平面構成になっている。聖堂は切妻屋根を基壇まで長く伸ばし、屋根の頂上部には採光窓を設け、格子模様デザイン

した天井からの自然光を利用して聖堂内部の宗教雰囲気を作成しようとした工夫が読み取れる。河内は伝統的な破風屋根、格子などの要素をデザインに取り込む一方、屋根の頂上部に現代的な採光窓を設けるなどの設計手法によって、このコンペの主眼であった「モダン、日本的、宗教的、記念的」という要求に答えようとした工夫したと考えられる。



写真1 児童文化会館(昭和23年竣工)

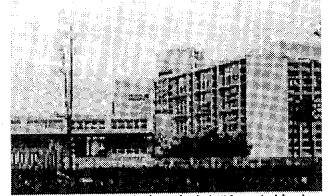


写真2 社会保険広島市民病院(昭和26年竣工)

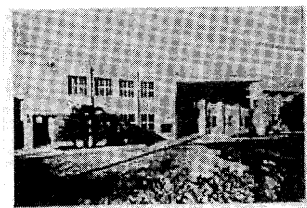


写真3 広島ガスビル

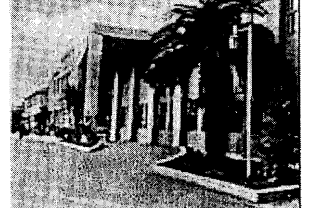


写真4 広島ガスビル車寄せ部分

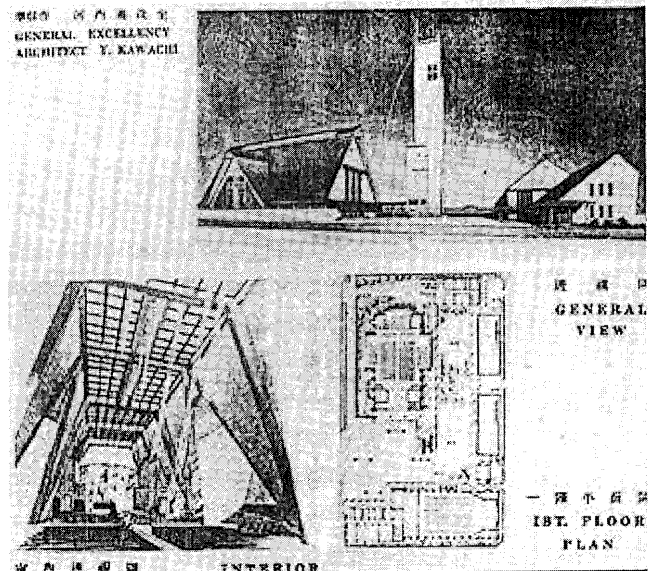


図1 広島平和記念聖堂コンペの準佳作に入賞した河内案

表4 晩設計事務所時代河内が関係した主な作品

主な作品名称/構造・規模/竣工年/所在地/状態
●広島女学院中、高校校舎/木造/昭和22/広島/撤去 ●広陵高校/木造/昭和22/広島/撤去 ●児童文化会館/木造/昭和23/広島/撤去 ●山陽中学/木造/昭和23/広島/撤去 ●広島女学院講堂/木造/昭和23/広島/撤去 ●広島毎日新聞広島支局/共同/木造/昭和23/広島/撤去 ●名古屋市民病院/共同/RC造/昭和23・名古屋/不詳 ●広島ガスビル/木造・2階建て/昭和24/広島/撤去 ●大正海上火災保険広島支店/共同/RC造・3階/昭和25/広島/不詳 ●社会保険広島市民病院/RC造・4階建て(部分2階)/昭和26/広島市/残存

注: 表4は同僚大旗正二の証言などに基づいて筆者が作成した。

### 2-3. 河内義就建築事務所時期

社会保険市民病院の第1期設計の完了を機として、河内は5年間の晩設計勤務を辞し、昭和26年2月河内義就設計事務所を設立する。河内の残した資料によると、当時事務所のスタッフは河内以外に佐藤、秋山の3人だった。後に名古屋工業専門学校建築学科を卒業した清水一男<sup>37)</sup>や国鉄技術者であった和田?らが次々参加し、7, 8名となる<sup>38)</sup>。和田は河内設計の社会保険市民病院の建築を見て発奮して設計事務所の経営を目指し河内設計事務所に参加したという<sup>39)</sup>。昭和35年清水が独立して清水設計事務所を開設し、昭和36年には

錦織亮雄<sup>40</sup>が河内義就設計事務所に参加する。河内も「経営責任者となってみると、なかなか自分で直接、製図をすることが出来なくなりました。また若い人を育てるにも、ある程度責任を持たせてまかせざるを得ず、だんだん実務から離れ、サジェストとチェック程度のこととなってしまいます。」<sup>41</sup>と後になって述べているように、晩年になると設計事務所の設計実働は河内の下に和田と清水一男が配され、その2人が主に設計を行う構成であった。本や雑誌に掲載されている河内の独立時期の作品をまとめると表5になる。ここで、河内の独立時代の主な作品について考察して見よう。

表5 河内義就設計事務所時代の主な作品

主な作品名称/構造・規模/竣工年/所在地/状態
1. 広島毎日会館/RC造・5階建て/昭和29/広島市/撤去
2. 矢野公民館/木造・2階建て/昭和29/広島県安芸郡矢野町/撤去
3. I氏邸/補強コンクリートブロック造・平屋/昭和29/広島市/不詳
4. U氏邸/木造・平屋/昭和29/呉市/不詳
5. 宮島競艇場/木造/昭和29/佐伯郡大野町/撤去
6. 府中町公民館講堂/RC造・平屋(一部2階)/昭和30/安芸郡府中町/現存
7. M氏邸/補強コンクリートブロック造・2階建て/昭和30/佐伯郡五日市町/不詳
8. 藤垂園団地計画/昭和30/佐伯郡五日市町/現存
9. K氏邸/木造・平屋(一部2階建て)/昭和30/広島市/不詳
10. シャンソン/木造/昭和30/広島市/不詳
11. 静養院/RC造・2階(塔屋4階)/昭和30年/安芸郡府中町/不詳
12. 梅坪/木造/昭和30/広島市/不詳
13. 広島労働会館/RC造・5階(一部6階)/昭和33/広島市/現存
14. 広島建設会館/RC造・3階建て/昭和34/広島市/撤去
15. 宮島ロープウェイ/S,RC造/昭和34/佐伯郡宮島町/現存
16. 広島銀行三川町支店/RC造・2階/昭和34/広島市/撤去
17. 広島銀行広支店/RC造・3階建て/昭和34/呉市/撤去
18. 広島銀行練成道場/木造・2階/昭和34/佐伯郡大野町/不詳
19. 武田学園校舎/RC造・3階建て/昭和35/安芸郡都部町/撤去
20. 広島工業短期大学校舎/RC造・3階建て/昭和35/佐伯郡五日市町/現存
21. 楽々園プラネタリウム/RC造・平屋/昭和35/佐伯郡五日市町/撤去
22. 広島銀行保養所浴場/木造・平屋(部分2階)/昭和35/佐伯郡五日市町/不詳
23. 広島ゴルフクラブハウス/S,RC造/昭和35/佐伯郡五日市町/撤去
24. 広島殉職医師記念碑/上野勇と共同/RC造/昭和35/広島市/現存
25. 府中南小学校校舎/RC造/昭和36/安芸郡府中町/撤去
26. 国泰寺中学校屋内体操場/RC造・平屋(部分2階)/昭和36/広島市/現存
27. 広電第一ビル/RC造/昭和36/広島市/不詳
28. 広島電鉄女子寮/RC造・5階/昭和36/広島市/撤去
29. 佐々木氏邸/木造/昭和36/広島市/不詳
30. 呉信用金庫及び事務センター/日建設計と共同/S,RC造・8階/昭和41/呉市/残存
31. 広島県立美術館/広島県営繕課と協力/RC造/昭和43/広島市/撤去
32. 呉商工会議所/SRC造/昭和44/呉市/現存
33. 広島県産業会館/RC造・平屋/昭和45/広島市/残存
34. 広島工業大学附属図書館/RC造・3階/昭和46/佐伯郡/現存
35. 岩国センチュリーゴルフクラブハウス/RC造/昭和50/山口県岩国市/現存
36. みゆきプラザ/SRC造/昭和53/広島市/現存
37. 真光寺本堂/S造/昭和54/福山市駅家町/現存
38. 広島銀行本川支店・本川信愛ビル/SRC造/昭和54/広島市/現存
39. 福井邸/S造/昭和55/広島県府中市本山町/不詳
40. 広島県立身体障害者リハビリテーション/SRC造/昭和56/東広島市/現存
41. 山県西部消防組合消防本部庁舎/RC造・2階/昭和57/山県郡高質村/現存
42. 広島県立広島井口高等学校/SRC造/昭和57/広島市/現存
43. 広島県立社会教育センター/RC造・4階/昭和57/広島市/現存

注:表5は河内義就建築設計事務所から提供された河内義就の生前残した資料を中心に、「広島建築」II, III(昭和31年9月、昭和37年11月、昭和58年3月発行)、中国新聞などを参照し、また同僚大塚正二氏の証言などに基づいて筆者が作成した。なお、独立時代の作品は本や雑誌に掲載された作品のみである。

- 1) 広島毎日会館:独立後事務所の初の設計は広島毎日会館(昭和29年竣工、写真5)であった。この建物は、RC造5階建の大規模なもので、復興当時としては堂々たる建築であった。ファサードは正面の中央に大きな開口を設け、そこにコンクリート打ちによる薄い庇を付けるなどの特徴を表している。このようにコンクリートによる薄い庇(縦横)のデザインを開口部に施す意匠は彼の晩設計事務所時代の設計である市民病院建築にも現れている。
- 2) 矢野公民館:この建物(写真6)は、昭和20年武田正夫翁が矢野町に寄付した450坪の敷地に娯楽の公共施設として昭和29年に建てられた<sup>42</sup>。この建物の特徴はゆるやかに傾いた切り妻屋根を左右に伸ばし、2階の部分突き出してファサードに変形を加えており、1階出入口はピロティとして開放的に扱っている。
- 3) 府中町中央公民館:昭和30年に竣工した府中町中央公民館講堂

(写真7)は現存しているので、今回調査によってその詳細が明らかになった。府中公民館の建設をめぐり、当時府中町では、中央公民館を造る運動が昭和22年頃から始められ、婦人会、青年会などを中心として公民館建設大会も開かれた。この町民の願いはやがて町議会でも話し合わせ、ついに昭和25年に府中南部公民館(現在府中南公民館)ができ、昭和30年には府中中央公民館(現在府中公民館)が建設される。この建物は公民館敷地内の南側に位置し、東側を入り口としている。中に入ると柱以外の壁がほぼガラス張りとなっており、非常に明るい。一階の窓は改装されアルミサッシが使われているが、二階部分は鉄の枠が当時のまま使用されている。二階には映写室と観覧席が設けられている。外観は緩やかなアーチ型屋根の下中央にデザインされている無数の水玉模様の換気孔と連続した半柱や大きな窓が非常に特徴的である。このような設計手法は後の府中南小学校校舎(昭和36年竣工、写真20)にも現れている。現在の市職員は「当時の府中公民館は公民館として日本一の規模と設備を備えるとともに、その斬新なデザインから各地から多くの見学者が来館した」と述べ、館長の田上敏文も「斬新なデザインは、当時の人々の公民館に寄せる思いを物語っています。」<sup>43</sup>と述べているように、この建物のデザインは当時の人々の感心をもたらしたことが伺える。現在もこの講堂は軽スポーツサークル、講演会場、選挙会場などに利用されている。

4) 静養院:静養院建築(写真8)は、RC造2階建ての規模で、白い壁、大きな窓、方立の細かいバランスの上げ下げ窓から構成され、屋上にはカンティレバーのサンルームが設けられ、軽快で明るく威圧感を与えない親しみ易い外観になっている。この建物からは、戦前通信省風の合理主義的な建築の設計手法が伺える。

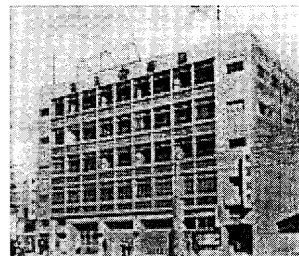


写真5 広島毎日会館 (昭和29年)

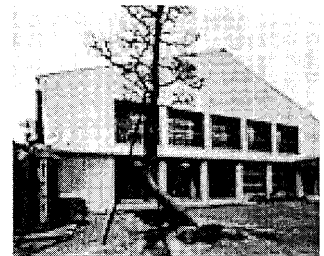


写真6 矢野公民館 (昭和29年)

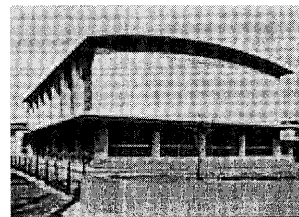


写真7 府中町中央公民館講堂 (昭和30年)

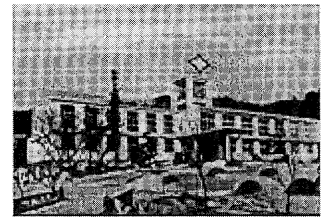


写真8 広島市静養院 (昭和30年)

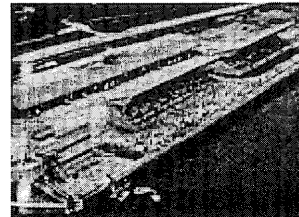


写真9 宮島競艇場 (昭和29年)

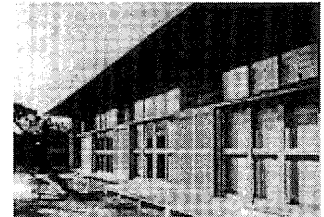


写真10 I氏邸 (昭和29年)

5) 宮島競艇場:晩設計事務所時代に大空間木造である児童文化会館の設計を経験した河内は、昭和29年宮島に建てられた宮島競艇場(写真9)の設計に携わる。一連の建築群はいずれも木造であった。



大きい屋根を斜めに設けた観覧席、3階建ての指揮台、切妻屋根を設けた休憩場所、などはシンプルながらも、豊かな空間を構成している。詳細は不明であるが、このような大規模の建築に勾配屋根を斜めに延ばして設けるなど宮島という伝統的な街並みに溶け込んだようなデザインを施そうとした設計者の工夫が読み取れる。

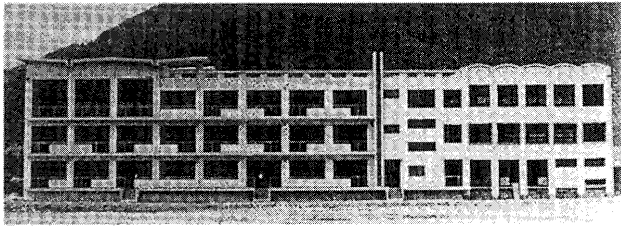


写真11 武田学園校舎 (昭和35年)

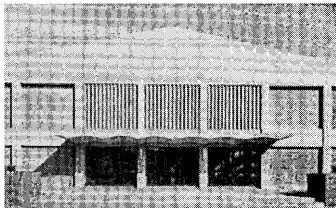


写真12 国泰寺中学校屋内体操場 (昭和36年)

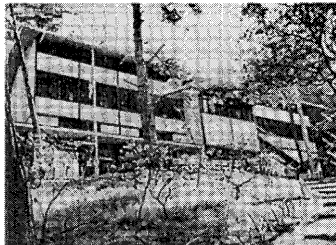


写真14 宮島ロープウェイ (昭和34年)

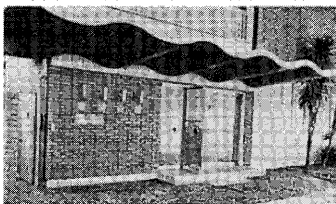


写真16 広島建設会館 (昭和34年)

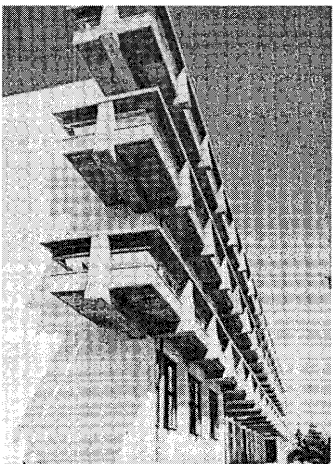


写真18 広島工業短期大学校舎 (昭和35年)

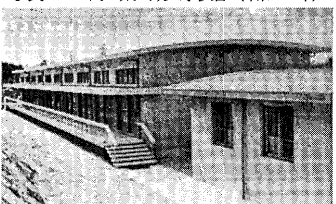


写真20 府中南小学校校舎 (昭和36年)

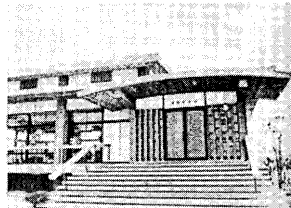


写真13 広島銀行練成道場 (昭和34年)

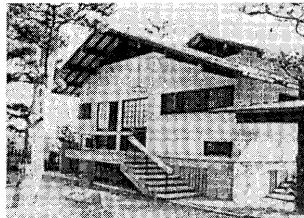


写真15 広島銀行保養所浴場 (昭和35年)



写真17 広島銀行三川町支店 (昭和34年)

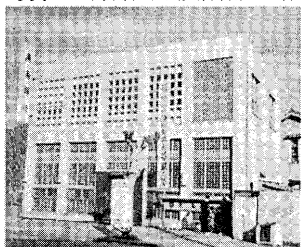


写真19 広島銀行広支店 (昭和34年)

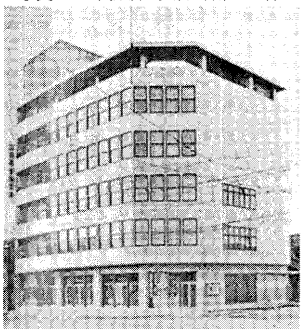


写真21 広島労働会館 (昭和33年)

6) 武田学園校舎：武田学園<sup>44</sup>校舎 (写真11) は、広島女子専門学校として現在の広島安佐市民病院の場所に建設された。武田学園創立三十五周年記念誌には「設計は従来通り河内設計事務所をお願いした。建物は、なかなか工夫を凝らしたデザインで、また建築も入念ですばらしいもので、三十五年九月から取りかかり翌三十六年六月竣工したのである (鉄筋三階建て約700坪)。この建物は、鉄筋コンクリート建てで、当時の田舎の学校としては珍しく、近郊にないと言って、方々から参観に来られるような状態であった。この建物の変わったところは、まず基礎が高くて地下室が物置になっていること。そして、階段教室 (理科室)、整容室 (鏡の間) 付きの被服構成室 (和裁)、各机に電気コンセント付きでアイロンやミシンの使用に机を離れないでできる便利さを考えている被服構成室 (洋裁)、そして図書室は天井を高くして明るくしてあるなど、当時としては非常に合理的に近代的にできていたと思う。」<sup>45</sup>と書かれている。この建物の外観は、ゆるやかなアーチ型を繰り返した屋根の形式や傾斜をつけた屋根形を用いており、ファサードの開口部も機能によって大きさが異なる窓が設けられているなどの特徴を表している。特に教室部の胴蛇腹には薄い庇を設け、教室への直射光を避ける一方、窓台を低くして威圧感を除いている点、教室内の照度分布に偏りをなくそうとしているなど、肌理細かな意匠が施されている。この建物には吉武泰水の初の作品であり、戦後はじめての鉄筋コンクリート校舎である成蹊中学校<sup>46</sup> (昭和26年) の設計手法が伺える。

7) 国泰寺中学校屋内体操場：この建築 (写真12) は、トラス構造によって屋上は切妻型になっており、正面の入り口には波型の曲面庇がデザインされ、豊かな陰影が外観を飾っている。また入り口上の正面の真ん中には、縦向きの格子をデザインした格子付窓を設けるなど優雅でスマートな感じの建物になっている。ここで採用された波型庇の設計手法は、昭和30年竣工の梅坪の建築では庇に瓦を葺いて曲面を表しており、それが発展して昭和34年竣工の広島建設会館 (写真7) 入り口の庇に初めて現れていたのである。河内はこのようにコンクリートによる格子や庇の美によって伝統表現をはかったのであろう。

8) 広島工業短期大学校舎：広島工業短期大学校舎 (昭和35年竣工、写真18) では、鉄筋コンクリート打放しで出来た日本伝統を表わすペランダの手摺りのデザインが注目の点である。この手すりは建物からはみ出すように建物の両端から突出している。外廊下の端に行くには、一人がやっと通ることしかできないスペースになっており、雨の日には雨が降りこんでくると言われているほどあまり実用的ではない。このように無理しても、日本伝統的美要素をデザインに施そうとした工夫などは、河内の作品傾向の特徴でもあった。

9) 広島労働会館：この建物 (昭和33年、写真21) はRC造6階建ての規模で、当時の広島では堂々たる建築であった。この作品は『建築と社会』(1958年12月号 pp26) に掲載されている。河内は「広島労働会館の設計に当たってはいかめしい形態、内容をさげ、一般大衆に親しみやすい建物にすること、および労働者の福利施設として、性質の異なる多種目的に使用される内容を一つの建物に配置収容するよう要望され、それを最小限度の予算により最大限に満足できるよう苦心した。」と述べている<sup>47</sup>ように、合理主義的な傾向が読み取れるが、屋上休憩場に乘せた屋根、窓周辺に日本伝統的な美要素をデザインするなどの工夫も見られる。

10) その他：銀行関係建築の設計に広島銀行三川町支店（昭和 34 年、写真 17）、広島銀行広支店（昭和 34 年、写真 19）などがあるが、何れも薄い鉄筋コンクリート格子付窓が特徴的であった。また銀行施設として、広島県建築士会主催昭和 35 年度建築作品コンクールに入賞した広島銀行練成道場（昭和 34 年、写真 13）は、広島銀行保養所欲場（昭和 35 年、写真 15）とともに、木造建築であるが、入口周辺や屋根部位に変形を加え、日本伝統的なデザインを施すなど、優雅な感じを与えられるデザインになっている。昭和 34 年竣工の宮島ロープウェイ（写真 14）の建築は一見木造に見えるが実は鉄筋コンクリート造であり、伝統と新しい材料や技術を上手く調和して宮島という自然環境に溶け込んだようなデザインになっている。昭和 35 年には記念碑建築に殉職医師記念碑を設計するが、当時広島で東洋名画劇場（昭和 29 年）などを設計した友人上野勇<sup>48</sup>との共同作品になる。記念碑は、鉄筋コンクリート打放しによる素材感が溢れる重厚な感じのデザインになっている。その他、住宅設計に M 氏邸（昭和 30 年）、I 氏邸（昭和 29 年、写真 10）、K 氏邸（昭和 30 年）等があるが、何れも木造であり、『広島の建築／1945～55』（広島建築士会昭和 31 年）に掲載されている。これらの住宅建築は切妻屋根を葺いた破風建築に窓を大きく設けるなどの特徴を表している。なお、広島県営繕課と協力して、村田正とともに設計した広島県立美術館（昭和 43 年）があり、『建築と社会』（1970 年 12 月号 pp39）で紹介されている。その他、中国電気工事本店ビルの建築が『SD』（1972 年 3 月号 pp143）で紹介され、広島工業大学附属図書館（昭和 46 年）は『新建築』（1972 年 4 月号 pp265）と『SD』（1973 年 1 月号 pp129）に、広島県立社会教育センター（昭和 57 年）の建築は『建築画報』（1985 年 7 月号）に掲載されている。広島県立社会教育センター建築の外観は全面を 50 角のタイル貼とし、窓枠、軒など細かい部分にポイント的にデザインを施し、出隅を曲線にしてソフトなイメージにするなどの特徴が読み取れる。

### 3. 河内義就の作品傾向

前章で明らかにしたように、河内は通信省営繕課時代に山田守の下で製図に携わるなど建築活動を行うが彼の作品と確認できるものは殆どなく、修業時期であったと言ってもよいだろう。また満州国郵政省時代の作品は今のところ不明である。そこで、本章では主に広島における作品を中心に河内の作品傾向や位置付けについて考察を試みる。第 2 章で明らかにしたように、彼の作品のデザイン特徴をまとめると、①昭和 26 年竣工の社会保険広島市民病院や昭和 29 年竣工の広島毎日会館などの建築には開口部にコンクリートによる格子模様の薄い庇を設けることにより、日本伝統建築の建具の美を表そうとした工夫が伺える。このようなデザイン傾向は後の国泰寺中学校屋内体操場（昭和 36 年）、広島銀行三川町支店（昭和 34 年）、広島銀行広支店（昭和 34 年）などにも現れていること。②昭和 23 年竣工の児童文化会館や昭和 29 年竣工の宮島競艇場の建築及び世界平和記念聖堂コンペにおいては勾配屋根の形式に変形を加え、新しい勾配屋根の形式を模索しており、後の武田学園校舎（昭和 35 年）や府中南小学校校舎にはアーチ模様の屋根の形式を取り入れるなど、屋根のデザインに工夫したこと。③昭和 36 年竣工の国泰寺中学校屋内体操場や昭和 34 年竣工の広島建設会館などの建築の入口にはコンクリートによる波型庇のデザインを施していること。④広

島工業短期大学校舎の外廊下には無理してコンクリートによる伝統的な手摺りをデザインしたこと。⑤なお、宮島ロープウェイ（昭和 34 年）の建築は一見木造に見えるが実は鉄筋コンクリート造であり、伝統と新しい材料や技術を上手く調和して宮島という自然環境に溶け込んだようなデザインを施すなど地域の風土を視野に入れた河内のデザイン工夫が伺えること、などである。

以上のように河内の作品傾向を見ると、戦後モダニズム潮流の影響を受けながらも、児童文化会館、広島社会保険市民病院、国泰寺中学校屋内体操場、広島工業短期大学校舎、などの建築のように、プロポーションの美しさを配慮した古典的な構成と、伝統的な屋根や格子建具など日本の伝統文化を積極的にデザインに導入する傾向が読み取れる。特に 30 年代の作品には、建物の屋根、軒、開口部、入口の庇など細かい部分に新しい材料や技術を用いて日本の伝統建築の美的様式をデザインするなどの特徴が現れている。昭和 30 年代と言えば、丹下健三の設計による広島平和記念館（昭和 30 年竣工）は戦後の日本の伝統とモダニズムの関係を表す伝統論争を起し、日本近代建築の発展に大きな役割を果たしたのである。藤森照信は「広島ピースセンター本館によってコンクリートによる柱梁の美は確立され、伝統論争の中では自分の表現の根拠を「美しいもののみ機能的である」と言語化して見せた」<sup>49</sup>と指摘している。これらの作品は当時の建築家達に、特に広島の地元建築家には絶大な影響を与えたと言っても過言ではないだろう。戦後広島の復興において丹下との交流があったとされる<sup>50</sup>河内にとっても例外ではなかっただろう。丹下はコンクリートによる柱梁美によって伝統表現を果たしたとするなら、河内はコンクリートによる開口部の格子や波型庇の美によって伝統表現をはかろうとしたと言っても過言ではないだろう。昭和 30 年代における河内義就の一連の作品は、丹下健三の平和記念館などのように戦後日本の近代建築の発展に絶大な影響を与えるほどの建築ではなかったが、戦後日本の伝統と近代建築の問題を考える上で興味深い作品であろう。

このように、新しい技術や材料を利用して日本的な伝統建築の美的要素を近代建築に表現しようとした河内のデザイン工夫は、彼の作品だけでなく一連の発言にもよく見られる。河内は「グローピウス博士を囲む座談会」において、「日本の建築家の悩みとして痛感するのは日本の伝統的な性格として、表現が内向的であるので、近代の技術を西欧から受け入れるについて、西欧の外向的な表現を基本に持つものとの調和が非常に難しいと思っているが。」とグローピウスに伺っているように、伝統建築と近代建築の融合に深い関心を表していた。また「先刻宮島の大鳥居の所で大きな材木がなければ小さな部材を組み合わせてもよいと言っておられたが、日本では材木を単に材料としてのみ見ないで、木の神性を重んじている。例えば家の柱でも元末を逆にすることは嫌いな長い桁でも順々に送り継ぎをして行くというような精神があるので許されないのではあるまいか」と伺うなど、日本の伝統建築の美的要素を賛美する心構えを表したのである。また資料によると、河内は「グローピウス氏は確かにドイツのバウハウス時代から大いに変わっている。英国に渡って以来作品に甘さが出て来た、昔の作品は鋭角な合理主義美に徹した感じであったが、最近ではヒューマニティが滲み出ている。」とグローピウスの作品に対する見解を述べ、また「先刻鳥居の話を出したのもあれをきっかけにして博士の合理主義と人間性の調和の限界点を探ろうと

したのだが。」と述べるなど、合理主義と人間性の調和に対する鋭い感覚を表わしていた。なお河内は「師、中村順平」（『建築雑誌』1984年3月号）において、師匠中村順平の古典の基礎の上に日本人による日本の現代建築を創造すべきであるとの理想を力説されたことを指摘し、「桂離宮の美は万人が認めるところであり、日本の誇り否世界の美の一つであろう。桂の伝統を現代建築に創造し得る人は誰であろうか。国籍不明の建築の続出する中で真の現代日本を生み出す日はいつになるのであろうか。」と述べているように、晩年においても中村順平から受けた建築教育を深味しつつ、日本的な近代建築について深い関心を持っていたのである。

## むすび

以上のように、中村順平の弟子であった河内は、戦前通信省官繕課や満州国郵政総局経理科官繕股での建築活動を経て、戦後は地方都市広島を拠点に精力的に建築活動を行い、広島地域においては大きな影響力を有した建築家であった。

河内は、地元の建築家大旗正二や村田正らとともに、広島県建築史事務所協会の創立者の一人であり、彼が関係した建築は、当時の背景の中では数多く、特に児童文化会館、社会保険広島市民病院建築、広島ガスビルなど、終戦直後の広島でかなり重要な建物を設計する等、被爆後の広島の復興建設に大きな貢献をした建築家であった。河内義就は設計活動を行う一方、日本建築学会、日本建築家協会など社会団体でも幅広くその才能を発揮した人物であったことを特筆しておく。彼の作品を見ると、戦後インタナショナルスタイルのデザイン要素を残しながらも、建物の入口の庇や開口部周辺、軒蛇腹部などに変形を加え、伝統的な細部意匠を施すなど、伝統建築と近代建築の融合をはかろうとした傾向が強い。河内が学校時代受けた強い影響は横浜高等工業学校建築科の中村順平教授からであり、伝統建築と近代建築のあり方への関心が強かった。それは河内の作品に見られるだけでなく、「グロピウスを囲む座談会」での彼の一連の発言や「師、中村順平」（『建築雑誌』1984年3月号）、「心のふるさと」などの著述でもよく現れていた。河内も述べているように、恩師中村順平の古典に根ざす建築の根元的な美的把握を目指した建築教育が河内の建築活動に一貫して大きな影響を及ぼしたことを裏付ける。彼の戦後日本的な近代建築の創造を意識した設計姿勢、建築的デザイン感覚を評価したい。

## 謝辞

本論文をまとめるにあたり、故河内義就の遺族である（有）河内義就設計事務所代表取締役河内内利氏から貴重な情報をいただいた。また大旗正二氏から貴重な資料を提供していただいた。記して深謝申し上げる。

## 注

- 河内義就の本名は高田義就であり、昭和16年河内家の長女に嫁入として入ってからは河内と改姓したのであるが、本稿では河内義就と称することにする。
- 李明、石丸紀興「終戦直後の広島における戦後設計事務所活動について」戦前・戦後の広島における建築家の活動とその役割に関する研究（日本建築学会計画系論文集第537号pp311-318）。
- 大旗正二は横浜高等工業学校時代河内の1年先輩であり、戦後設計事務所時代共に広島復興で活躍した建築家の一人である。大旗については拙稿「建築家大旗正二の経歴と建築活動について—地方における建築家の活動に関する研究」（日本建築学会計画系論文集第575号）で詳しく論じている。
- 資料的には、可能な限り河内義就に関する資料を収集することにつきるが、そのために例えば少しでも戦後設計について触れた文献・資料を検索・収集すること、大旗正二の本人や（故）河内義就の遺族に連絡を取り、訪ねるなどして私的な資料を含めて収集することなどによって補完した。
- 角幸博「建築家マックス・ヘンデルの経歴と作品について」（日本建築学会計画系論文集第465号）、上田恭嗣「建築家薬師寺主計の経歴と建築活動について」（日本建築学会計画系論文集第509号）、石田潤一郎「関西の近代建築」（中央公論美術出版社1996年）。
- 前掲注2）と拙稿「建築家大旗正二の経歴と建築活動について—地方における建築家の活動に関する研究」（日本建築学会計画系論文集第575号2004.1）などがある。

- 前掲中2）の拙稿。
- 父は高田義定、母松代の次男として誕生した。
- 河内が残した資料によると河内本家は村最大の山林王と言われている家であったという。
- 河内義就が残した資料「河内義就の前世高田家の家譜、覚書」による。
- 河内義就「ひろしまの建築今昔5/秀逸だった浅野図書館」（『日刊中国建設新聞』昭和59年4月19日付）。
- 大旗氏の証言と『日本近代建築学発達史』（日本建築学会編PP1840）を参照した。
- 河内義就「ひろしまの建築今昔7/スタートは古典の習熟」（『日刊中国建設新聞』昭和59年4月23日付）。
- 前掲注13）。
- 中村順平はエコール・デ・ボザルの圧縮形ともいべき教育法で French Renaissance を目指して製図の指導に当たった。
- 河内義就「師、中村順平」（日本建築学会誌『建築雑誌』1984年3月号）による。
- 河内義就「ひろしまの建築今昔8/念願だった事務所設立」（『日刊中国建設新聞』昭和59年4月25日付）。
- 河内義就「ひろしまの建築今昔9/広島復興を願って帰郷」（『日刊中国建設新聞』昭和59年4月27日付）による。
- 戦後広島初の設計事務所であった戦後設計事務所は、広島市立広島工業学校建築科を卒業し、広島県土木部官繕課現場監督員を経て、東京の渡辺仁建築事務所にて建築設計の仕事に従事し、また東洋工業株式会社にて建築設計の仕事に従事していた村田正が広島において柴田実（戦部隊建技大尉）とともに昭和21年4月に設立したのである。
- 前掲注18）。
- 当時は、小田設計事務所、戦後設計事務所、杉田三郎建築事務所、ワイ建築設計事務所、ARB建築設計事務所、片田建築設計事務所の6事務所であった。建築家クラブは後の広島建築士事務所協会として発展し、広島の建築事業の発展に大きな役割を果たしたのである。
- 建築家クラブについては、河内義就、村田正、大旗正二など7人の座談会によってその設立年代と名称が明らかになった。その座談会の記録は広島県建築士事務所協会「社団法人設立10周年記念誌」（1987年）に所収されている。
- 「グロピウス博士を囲む座談会」（広島県建築士会誌No4、1954年9月29日）に所収。
- 昭和37年11月14日日本建築士会連合会会長より建築士会発展に寄与した功績により表彰され、昭和38年5月12日農林大臣より、備後地方総合開発推進の功績により表彰される。同年10月25日広島県建築士会会長より、永年役員として建築士会発展に寄与した功績により表彰。昭和45年6月20日広島県建築設計事務所協会会長より、永年役員として協会発展に寄与した功績により表彰される。また昭和58年2月日本建築士事務所協会連合会会長より、業界発展に寄与した功績により表彰される。
- 前掲注13）。
- 山田守建築作品集刊行会『山田守建築作品集』（東海大学出版会昭和42年）
- 前掲注11）。
- 前掲注2）拙稿。
- 前掲注2）の拙稿において明らかにしたが、この会館建築も1000人収容の木造2階建て、造形を見ると、会館はホールのカマゴ型の屋根を中心に、機械によって造形を組み合わせようとした工夫が認められる。入り口は、丸い柱を連続させるなど開放的な感覚を表し、閲覧室部分は、円滑なる曲面を入れて大きな窓を設ける等モダンなデザインを施している。又、いずれの窓も細かくデザインされ、伝統的な積木細工的印象を表している。築地・太陽の階段式ワンフロアの客席、舞台の広さなどの先進的な設計手法を児童文化会館の設計に採用したのである。
- 建築技術者の技術能力を検定して、その資質を確保するため、建築物の設計工事管理を行う技術者の資格を定めて、その業務の適正化を図る。
- 前掲注2）拙稿。
- 広島ガス『広島ガス80年史』1990.6による。
- 広島ガス『広島ガス80年史』1990.6 p140 による。
- 昭和32年に広島瓦斯からこの本社ビルの土地が売られた為それ以降の資料は残っており、撤去時期は不明である。
- コンペの結果は建築界、建築学会等で相当な議論が行われた。日本建築学会発行の『建築雑誌』（1948年7月）に岸田日出刀が「1等必選」を発表したことから火がつかった。記念聖堂のコンペの結果を報じたのは『建築雑誌』1948年8月号であったが、岸田は早期に執筆したのであった。
- 李明、その他「戦後日本のコンペに見る建築家の建築計画・設計理念とその手法に関する研究その2」（広島平和記念聖堂設計競技における2等・3等入賞者の比較考察）（日本建築学会2003年度大会（東海）学術講演要録集2003年9月）において著者の考察を試みたのみである。
- 清水一男は昭和25年名古屋工業専門学校（現名古屋工業大学）建築学科を卒業し戦後設計事務所に入社。昭和26年河内とともに河内義就設計事務所を創設。昭和35年4月に清水設計事務所を開業し、活動場所を三重県に移る。現在三重県設計管理協会会長、同建築士事務所協会会長などを務める。代表的な作品に協同組合津沼商業センター、三重県立津東高等学校等がある。
- 佐藤、秋山、和田については具体的な資料が残っていない。
- 河内義就「広島市の建築今昔18」（『日刊中国建設新聞』昭和59年5月12日付）による。
- 錦織邦雄は昭和12年広島県生まれ、昭和36年京都工芸繊維大学工学部工芸学科卒業。昭和39年独立して都市建築研究所を開業し、平成4年新広島設計社社名を変更。現在広島市の中心的な建築家として活躍している。代表作品に広島市真亀公民館・児童館、本通り会館などがある。
- 河内義就「広島市の建築今昔17/独立、初仕事は毎日会館」（『日刊中国建設新聞』昭和59年5月11日付）による。
- 昭和54年になるとこの建物は撤去され現在の公民館が建設された。
- 府中町府中公民館発行『40年記念誌』より
- 現在武田学園広島文教女子大学となっている
- 広島女子文芸大学 武田学園創立三十五周年記念誌より。
- 柏木博、藤森照信、布野修司「建築作家の時代」（1987年8月25日pp28）を参照すること。
- 「設計者のことば」（『建築と社会』1958年12月号pp26）による。
- 当時中央から来たかなり有名な建築家であったと言われていたがその詳細は不明である。
- 『丹下健三』（丹下健三・藤森照信著、新建築社2002年9月10日）254頁による。
- 丹下は広島復興計画のために来広島したが、当時戦後設計事務所製図作業を行い、村田正、大旗正二、河内義就らと深い交流があったと大旗正二談。

## 図・写真出典

図1は、『平和記念広島カトリック聖堂建築競技設計図集』（東京新信洪洋社、昭和24年6月15日）に所収。写真1～19、21は、『広島市の建築I、II』（広島建築士会、昭和31年9月、昭和37年11月発行）に所収。写真20は筆者が撮影。

(2006年12月1日原稿受理、2007年4月10日採用決定)